



<b>Data</b>	2023-93
監督	ヴィットリオ・デ・シーカ
制作	カルロ・ポンティ
音楽	ヘンリー・マンシーニ
出演	ソフィア・ローレン/マルチ エロ・マストロヤンニ/リュ ドミラ・サベリエワ/ガリ ナ・アンドリーワ/アンナ・ カレナ/ゲルmano・ロンゴ/ グラウコ・オノラト/グナー ル・ジリンスキー/カルロ・ ポンティ Jr

## 👁️👁️ みどころ

イタリアの名作『ひまわり』を、53年を経て劇場で鑑賞！

本作前半では『あゝ結婚』(64年)を彷彿させる、若きナポリ女と結婚を嫌がるイタリア男の無邪気な恋愛風景が面白いが、後半からは様相が一変！老け顔になり、女優顔になった大女優ソフィア・ローレンの、1人でソ連に渡り、戦争が終わったのに戻ってこない夫探しの執念に注目！また、彼女が目にした、信じられない状態で今を生活している夫と可憐な妻、女の子の姿に注目！

本作冒頭、スクリーンいっぱい映し出される美しいひまわり畑は一体ナニ？そこに流れるヘンリー・マンシーニ作曲の美しい映画音楽はストーリー展開中に何度も流れるが、その度にあなたの心に響くものは一体ナニ？

2022年2/24のロシアによるウクライナ侵攻が継続している今、第2次世界大戦における“イタリアのソ連戦”のことを、『ひまわり』というタイトルの意味とともに、あらためてじっくりと考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■53年を経て、劇場で、あの名作を！■□■

私は中学時代に、毎月古本屋で購入した映画雑誌『スクリーン』と『映画の友』を読んでいたから、邦画情報だけでなく、洋画の情報も豊富に持っていた。その点が一学年上の兄と大きく違っていたから、それと正比例するかのように、学校の成績がトップクラスだった兄に対して、私は200人中150番前後をウロウロしていた。

男ばかりの中高一貫校だった私の周りに女の子は誰一人いなかったこともあって、思春期にあった私の興味はもっぱら美人女優に向かっていったが、洋画でのその対象のトップは一貫してオードリー・ヘップバーンだった。たまには『隊長ブルーバ』(62年)のクリスティーン・カウフマンや『恋愛専科』(62年)、『遠い喇叭』(64年)のズザンヌ・プレシエ

ット等々に“浮気”もしたが、さすがにハリウッドのセクシー女優、マリリン・モンローや、イタリアのグラマー女優、ソフィア・ローレンは対象外だった。しかし、中学時代に学校推薦（の宗教映画）で見た『エル・シド』（61年）で観たシメン役のソフィア・ローレンの美貌はすごかったし、50代、60代になってDVDで観た『クオ・ヴァディス』（51年）のソフィア・ローレンの美しさも際立っていた。

ソフィア・ローレンの代表作は『ひまわり』以上に、『ボッカチオ70』（62年）、『昨日・今日・明日』（63年）、『ローマ帝国の滅亡』（64年）、『あゝ結婚』（64年）等だが、料金の高い松山の“封切り館”で上映されていたそれらは、学校推薦（の宗教映画）ではなかったため、私は一切そこでは観ていない。もちろん、『ひまわり』を含め、その後にテレビ放映されたものは何度も観ているが、やはり封切り時に大スクリーンで観たものとは印象度において雲泥の差がある。

しかして、2020年に一度デジタル・リマスター化された本作が、2023年の今、そのマスター素材にさらなる修復を加えて、オリジナルに近い仕上がりを再現したデジタル・リマスター版として劇場で公開されたため、53年を経て劇場ではじめて鑑賞することに。

## ■□■映画と映画音楽は一体！あの名曲に感動！■□■

私は小学生の時から勉強しながらラジオを聴いていたが、中学生になった時にはじめて「テープレコーダー」をプレゼントしてもらったため、レコードプレイヤーやラジオからさまざまな音楽を録音して楽しみ始めた。当時、レコードは値段が高すぎたし、ステレオも夢の世界だった。（白黒）テレビは、中学3年生になってやっと我が家にも入ってきた。

そんな時代状況だったから、映画と一体になっている映画音楽は、圧倒的に当時の方が価値が高かったはずだ。70ミリの大作ともなれば、「オーバーチュア（序曲）」があり、また4時間近くの大作になると「インターミッション（休憩）」の音楽が入っていた。そんな1960年代に“映画音楽”として大ヒットしたものの代表がヘンリー・マンシーニ。その代表作は『ティファニーで朝食を』（61年）、『酒と薔薇の日々』（62年）、『シャレード』（63年）等だが、今日まで50年以上、人々の心に生き続けているのが、本作の『ひまわり』だ。

「ひまわり」は弁護士象徴として弁護士バッジにも刻まれている。また、私が弁護士登録した1974年には、テレビドラマ『帽子とひまわり』が大ヒットしたから、弁護士バッジに刻まれている「ひまわり」は、私にとってとりわけ重要な存在になった。しかし、何とんでも「ひまわり」を日本人に有名にしたのは、本作冒頭に見る、美しい音楽の中でスクリーンいっぱい映し出されるひまわり畑だ。これは一体どこにあるの？それは本作公開当時にも語られていたが、それから53年後、ウクライナ戦争が続いている今、より強く人々の記憶に残ることに・・・。

## ■□■第2次世界大戦における、イタリアの“ソ連戦”とは？■□■

戦後78年間も平和で自由な国に育ってきた今ドキの日本の10代の女の子の中には、「戦後78年」と聞いても、「ええ、うそー！日本はアメリカと戦争していたの？」と本気で聞

いてくる奴がいるらしい。そんな女の子は当然、「日独伊三国同盟」も「ヒトラーによる1939年9月1日のポーランド侵攻」も知らないだろう。

しかし、今年74歳になった私ですら、第2次世界大戦におけるイタリアの“ソ連戦”については、ほとんど知らなかった。まして、本作を観るまで、私は本作冒頭のスクリーンいっぱい広がるひまわり畑が、ウクライナ中部のポルタヴァ州で撮影されたものであり、その下には多くの戦没者が眠っていることを知らなかった。

本作のチラシには「東西冷戦時代にヨーロッパの国がソ連で映画撮影をすることは珍しく、当時のソ連の最新の設備が登場し、積極的に映画撮影に協力した政治的背景も興味深い。」と書かれているが、本作中盤には、そんなシーンがたくさん見られるので、それに注目！そんな本作のデジタル・リマスター版が2023年の今公開されたのは、もちろん、2022年2月24日に起きたロシアによるウクライナ侵攻を受けてのことだ。他方、本作のパンフレットには、①茶園昌宏氏（NHKプロデューサー）の『『ひまわり』に隠された、国家のうそ。』、②配給会社アンプラグドの『『ひまわり』修復と戦争、終わらないものの狭間で』があるので、これも本作（デジタル・リマスター版）を鑑賞するについては必読！今、改めて第2次世界大戦における、イタリアの“ソ連戦”をじっくりと考えたい。

## ■□■2人の女優の対比の妙に注目！メチャ感心！■□■

1970年当時のイタリアのグラマー女優、ソフィア・ローレンは、ある意味で“世界の妖精”と呼ばれたオードリー・ヘップバーン以上に有名で人気があった。そのソフィア・ローレンが、本作前半では“若き日の魅力”を振りまいているが、戦争が終わってもソ連から戻ってこない夫・アントニオ（マルチェロ・マストロヤンニ）を探すべく、単身でソ連に乗り込む後半からは、少し“老け顔”の鬼気迫る女優顔になってくる。“自由奔放さ”を売りにする（？）イタリア女にもこんな一途な面があったとは！！！！ほとんどの観客がそう思いながら、ジョバンナ（ソフィア・ローレン）と一緒に夫を探していたはずだから、モスクワ郊外の住宅地でアントニオの写真を見て動揺する若い主婦の姿を見ると・・・？さらに、その後、仕事を終えて彼女と小さい女の子が待つ家に帰ってきた男・アントニオの姿を見ると・・・？

私は「オードリー・ヘップバーン」がヘンリー・フォンダ及びメル・ファーラーと共演した『戦争と平和』（56年）を3、4度観ているが、『戦争と平和』のソ連版が65～67年に全2部作、6時間27分で作られたことを知ってビックリ！こりゃ必見！と鑑賞したが、そこでナターシャ役を演じた女優がリュドミラ・サベリエワだった。オードリー・ヘップバーン以上の可憐さを見せつけられて、「何と世界は広い！」「ソ連にはこんな可憐なバレリーナ上がりの女優がいるんだ」と感心させられたものだ。

しかして、本作中盤、深い雪の中での逃避行に倒れてしまい、死にかけていたアントニオを助け、小さな家庭を築き、一人娘と共に幸せに暮らしていたマーシャ役を演じたのがリュドミラ・サベリエワだった。アントニオの写真を持った突然のジョバンナの訪問に

マーシャが驚いたのは当然だが、そこで見せるマーシャの優しい対応は胸を打つものだ。そして、午後6時過ぎ、工場から列車に乗って戻ってくるアントニオを迎えるため、マーシャと共に駅に向かったジョバンナは、列車から降りてくるアントニオの姿を発見したが、さあ、そこでジョバンナが取った行動とは・・・？現在放映中のNHK大河ドラマ『どうする家康』では、毎回、大層に家康の選択肢が示されるが、本作のそれはそうではなく、あくまでジョバンナの感情の赴くままの咄嗟の行動だったはずだ。しかし、この出会いと別れのシーンが、53年後のデジタル・リマスター版の再上映でも涙を誘うのだから、映画ってホントにいいものだなア・・・。

なお、本作のパンフレットには、久保玲子氏（映画ライター）の「悲しみと気高さを堪えるヒロインは、時代を超えて生き続ける。」があるので、これも必読！もしジョバンナが見たアントニオの妻が、憎たらしそうな太ったロシア女だったら、きっとジョバンナの行動は違っていただろう。そう考えると、天下の女優ソフィア・ローレンに対して、ソ連が誇る最も可憐なバレリーナ女優リュドミラ・サベリーエワをマーシャ役に配した“配役の妙”にもしっかり注目したい。

## ■□■別れた後も続く、2人の愛の深さに大感動！■□■

石原裕次郎も出演していた『素晴らしきヒコーキ野郎』（65年）はメチャ面白い映画だったが、結局、米英が“いい役”を独占し、ドイツとソ連は悪玉（？）にされていたし、仏伊は米英の2番手に甘んじていた。しかし、日本人の目で仏と伊の男女を比べると、仏はアラン・ドロンやカトリーヌ・ドヌーブを代表とする美男美女の国であるのに対し、伊はジャン＝ポール・ベルモンドを代表とする、“何でもあり”の“遊び人男”と、本作前半のソフィア・ローレン演じるナポリ女ジョバンナのような、自由奔放で“誰とでもすぐに寝る女”というイメージだった。イタリア男が結婚による束縛を極端に嫌がっていることは、本作前半のアントニオの「結婚するくらいならサソリに噛まれた方がまし！」の言葉を聞けば明らかだ。ところが、そんなアントニオをうまくたらしこみ（？）、12日間のハネムーンを終えて、兵役に就く頃の2人は超ラブラブ関係になっていたから面白い。

本作前半のそんなイタリアの男女の描写は、ソフィア・ローレン主演の『あゝ結婚』と同じようなトーンだが、ソ連への旅の中でやっと巡り合えたアントニオが今は美しい妻マーシャとその間に生まれた一人娘と共に幸せに暮らしていることを知って絶望したジョバンナが、イタリアに戻ってしまうと、完全に2人の恋も愛もジ・エンド！誰もがそう思ったはずだが、意外にも・・・。

本作ラストに向けて今度は、アントニオが妻子を残して1人イタリアのジョバンナの元を訪れるシークエンスになるので、それに注目！その時、ジョバンナは如何なる立場に？そして、如何なる対応を？それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、本作ラストに見る、別れた後も続く、2人の愛の深さに私は大感動！

2023（令和5）年8月16日記